

千里地理通信

関西大学地理学研究会会報 第54号

Newsletter of Geographical Institution, Kansai University

Contents

Page 1~2

巻頭言

菊に寄せて
野間 晴雄

Page 3

実習調査報告

和歌山県岩出町実
習調査

新開 奈央

日帰り巡検報告

堺市日帰り巡検
吉兼 崇博

Page 4

卒業生だより

中学1年生の地
理的感覚 ~“ふ
るさと”再発見~
岡久 友香

Page 4~5

学窓から

関西大学での地
理学との出会い
曾我 傑

Page 6~7

研究ノート

エコツーリズム概
念の変遷について
貝柄 徹

Page 8

院生・学部生の業
績(2005.1~2005.12)

Page 8~9

教室だより

Page 10

随想

地(理・学)の再
生にむけて
木庭 元晴

Page 2, 4~5, 9...

卒業生・修了生か
らの一言

昨年12月4日、枚方パークの目玉であった大菊人形が95年の幕を下ろした。現役最古の菊人形であった。菊職人の高齢化と後継者難が直接の要因であるが、その背景には遊園地にでかける若い世代やニューファミリー層がこの伝統的職人芸を理解できなくなった世代間ギャップもあろう。枚方在住40年近い私は子供の頃は両親や友人と、結婚してからは家族でほぼ毎年訪れていた。子供も大きくなり、ここ十年はごぶさたしていたが、最後ということで久しぶりに見納めに行った。平日だったが、定年を迎えたシニア夫婦やおばちゃん集団で園内はごったがえしていた。期間中70万人の入場者は一昨年の倍で、消え去るものへの哀愁を誘う。ただ、肝心の菊人形は以前見た大仕掛けの絢爛豪華なものに比べると、小規模で動きも少なく、技術の衰えは隠せなかった。

菊人形とは何か。菊で作った人形という定義では何も見えてこない。等身大で、顔は人形で、衣装を生きた菊で作る。根・茎付きの菊を2・3株ずつまとめて水苔で包み、蘭草・藁で縛り「玉」を作る。それを胴殻といわれる人体を模した籠細工に巻き菊人形とする。3次元の胴殻に直線的な菊の茎を折り曲げながら、しかも水揚げが可能のように生かさねばならない。それでも10日ももたない。これを菊付けという。会場には補充の菊が片隅に置かれ、若い女性従業員がその世話に忙しく動き回る。菊人形のこの二律背反的な菊付けの職人技を担うのが菊師である。

菊人形の技術・文化の系譜を追求したのが枚方育ちの川井ゆう女史である。奈良女子大学の博士論文(家政学)で、おそらく日本で初めて系譜を明らかにした。そのエッセンスを『まんだ』(北河内の地域誌)に連載している(84号2004年, 85号2005年)。最後となった昨年の菊人形館の歴史やパネル、記念誌として配布した京阪の小冊子の知恵袋でもある。彼女によると、菊人形は江戸期に遡る

という。切り花で顔まですべて菊花で飾り大振りの菊人形を作った時期から、いかに現実に近

い姿をさせ、刻一刻と変わる表情を生花で表現するリアリズムへの流れがあった。西洋のドライフラワーとは似て非なるものだ。「生け花作り人形」は江戸千駄木の団子坂に発祥したが、明治20年代に名古屋の「黄花園」が興行化に成功し、東京や関西進出を果たした。岐阜の菊人形屋の浅野菊楽園や三河吉浜(高浜市)の菊師職人集団がそれを支える。関西では乗客誘致をめざした電鉄会社と菊人形がタイアップした。西宮香櫨園(阪神)、長野園地(高野登山鉄道)、住吉菊花園(南海)、須磨寺遊園地(山陽)とともに、京阪では香里遊園で開催された(1910年)。そこを住宅地として開発するため、移転したのが今の地である(12年)。一時期、宇治(19~23年)や千里山遊園(47・48年)で開催されたが、1949年以降は枚方公園に定着する。枚方が軍需工場や農用地に転用されたため、新京阪電鉄系列の千里山線千里山遊園駅(関大附属幼稚園の場所で、のちの花壇町駅)

菊に寄せて

野間 晴雄

卒業生・修了生 からの一言

岩間雅生

楽しかった。思い出せばその言葉が一番に出てくる。卒論を筆頭に様々な難関があったがやはり楽しかった。

甲斐荘周

最初はよくわからなかったのですが、最後には地理で良かったと思えました。長らくありがとうございました。

兼田明典

地理が学びたくてAO入試で入った関大。痛む足をかばいながらも仲間と乗り越えた沖縄実習が一番の思い出です。

川合はるな

大学で地理を学ぶことができ、本当に充実した学生生活をおくることができました。楽しかったです。

川那辺将也

地理学を通じて得た知識、仲間はとても素晴らしいものでした。お世話になった先生方ありがとうございました。

河野俊英

この4年間、大学で学んだことの中で最大の利益は、やはり地理に出会えたことだと思う。来年からは、より一層精進していきたい。

楠 直美

4年間本当に楽しかったです。お世話になった先生方、友達に感謝します。4月から社会人として邁進します！

が代役を果たしたのである。

この菊人形を見た1週間前、私は沖永良部島を26年ぶりに再訪した。私が卒論で取り上げたテッポウユリ球根栽培の変貌を確かめるためである。和泊町の核心地は菊の露地電照栽培に変わっていた。夜は真っ暗闇であった農地に、電灯がクラゲの大繁殖のように連なる光景に度肝を抜かれる。離島のハンディを、フェリーの冷蔵設備や高速道路網、航空路の整備によって克服し、札幌や東京を市場とする切り花栽培地に変身を遂げていた。第二次世界大戦前は欧米へのユリ球根輸出で外貨を稼ぎだし、戦後は海外輸出から国内移出に切り替え日本一を維持する。しかし78年に襲った観測史上最大といわれる沖永良部台風で膨大な借金を抱えた島民は、返済のためより収益性の高い切り花移出に望みを託す。輸入緩和で園芸大国オランダから色の鮮やかなオリエンタル系のユリ球根が幅をきかせ、日本の球根市場で永良部ユリの価値自体が下がったことも大きい。ただ、この島のすごいところは、この逆境を栽培品目転換で克服した。それが菊である。菊1本はユリよりも商品価値が低いが、ここには本土に比べて広い畑地があり、規模の経済と温暖な気候が市場進出に大きく貢献した。既存の四国や近畿の産地との競合を避けて、東京や札幌市場をめざした。

菊は挿し芽で増やす。ユリも球根の一部である鱗片を土に挿して増やす。いずれも栄養繁殖といわれる方法で、親が子を増殖する倍率は種子繁殖に比べると低い。容易に産地が拡大せず、競合による共倒れ防止にもなる。しかも、ユリも菊も亜熱帯の沖永良部では10月～11月に植え付け、冬・春が最盛期となり、台風が来る前の6月に作業を終える。暑い夏休みは文字通り仕事休みで、この間作物を収穫しないのは防災上も好ましい。面積で最大のサトウキビもしかり。かつての主食、サツマイモも可食部分は地中にあり台

風に強い。サウアーが注目した東南アジア沿岸部のタロイモを中心とした栄養繁殖が形を変えて、沖永良部では連綿と現代まで引き継がれている。菊以外の代替作目のソリダコやグラジオラス、サトイモも栄養繁殖。この一貫した栽培体系の継承に、進取の気性がうまく合致し、年粗収入2000万円を超える農家が多数いる鹿児島一、日本有数の園芸王国となった。高齢化による葬式ビジネス隆盛が菊需要の追い風となる。菊生産組合の元理事長と和泊の居酒屋で飲んでいたとき、「島は生きている」という言葉が何度もでてきた。過疎に悩む奄美本島や全国多くの離島とは違うという強烈な自負が言わしめる言葉だ。経済のゆとりが人のよさに磨きをかける。

菊人形は生きた菊をいかに見せ物として演出するかで職人は技を競い合った。沖永良部では栄養繁殖、防災作物という一線を堅持し、見事に生花用菊栽培で再生した。中国伝来の菊には桜や梅のはかなさや淡い中間色はないが、絢爛さを大衆娯楽にしてしまう日本人との出会いが用途を拡大した。

関大大学院留学中のベトナム人トゥアン君の姉夫婦が、南ドイツのアウグスブルクで開店したドイツ人相手の日本食レストランの名前も「菊」である。彼の友人筒井由起乃さんが命名し、私が看板を揮毫したこの店を昨年1月訪問した。80年代に東欧を転々とした出稼ぎ移住ベトナム人家族が選んだこの終着地で、既存のサンプル写真だけで鮭と照焼きのセットメニューを創案し、開業する器用さとバイタリテイ。人間どこでも生きてゆける見本でもある。安っぽいジャポニズムを連想する「さくら」でなく、菊と命名した筒井さんの感性もたいしたものだ。過去を回顧・復原するだけの地理学でなく「生きている」実感からそのルーツに迫る。菊三題はそんな元気を私に与えてくれた。

(本学教授)

実習調査報告

和歌山県岩出町実習調査

新開 奈央

2005年10月4日から7日にかけて、私達3回生は3泊4日で実習調査を行なった。調査地域は、春学期に一泊巡検でも訪れた紀ノ川右岸に位置する和歌山県岩出町。1日目、各自が岩出町役場に集合し、私達の実習調査は始まった。役場では、職員のみなさんに直接お話を伺ったり、地図や資料を提供していただいた。その後それらを用いて各班がそれぞれ本格的な調査を開始した。

私の班の目的は岩出町に見られるスプロール現象を把握することにある。実際に歩いて現在の土地利用を確認する必要があった。実習調査前とはとにかく不安だった。なぜなら吉田・中島両地区を、私を含めた3人の班員のみで調査期間内に隅々まで歩き回らなければならなかったからだ。そのため私達は調査地区を3分割し、割り当てられた地区を各自で調査することにした。もちろん、一人で知らない土地を歩くことに大きな不安も感じ、その土地を自分一人に任されたことに重い責任も感じた。しかし、こうすることが最も効率がよく、今思えば各自が責任を持ってしっかり調査できたことにつながったのではないと思う。

ところが調査は予想以上に困難を伴った。なぜならずっと大雨が降っていたからだ。片手に傘を持ちながら片手で画板を持ち、目の前の景観を見ながら地図に書き込む。そう簡単にはいかなかった…。

事前に用意した地図もびしょ濡れ、全身もびしょ濡れ。そんな時励みになったのは、同じ条件で調査している班員のがんばりだった。与えられた役割を果たさなければならぬと、きっと各自が強く感じていたはずだ。最終日、それぞれが調査した結果を1つの地図にまとめ上げた時、本当によくやったと大きな達成感を感じた。

全く馴染みのない土地であったにもかかわらず、歩き続けた4日後にはとても身近に感じる土地になっていた。どんなに優れた文献を読むよりも、自分の足で歩いてみるのが最もその土地を理解することにつながるのだと実感した。そして、地理が好きで地理を学びたいと同じ意志を持って集まった仲間達と、このように一つのことを成し遂げることができたことは、この大学生活で最も価値ある経験となったと言えるであろう。これから卒業論文を書くに当たっても、それぞれがこの実習を通して学んだことを活かしてゆくにちがいない。

(本学学部3回生)



アンケート調査の様子 (提供: 瀧由佳)



ロードサイトでの調査風景 (提供: 瀧由佳)

日帰り巡検報告

堺市日帰り巡検

吉兼 崇博

2005年10月23日、秋晴れの下、堺市日帰り巡検が行われた。テーマは、自然地理・歴史地理・伝統産業・都市問題の分野に及ぶ。

堺は、近世の干拓によって西に拡大し、それに伴い灯台も50年間隔で西に移転してきた。古くからの中心部は、いまだに碁盤の目状であり、寺町や門前町も見られる。特に、西本願寺堺別院は現在も、門前町を従える寺院としての風格を十分に醸し出していた。

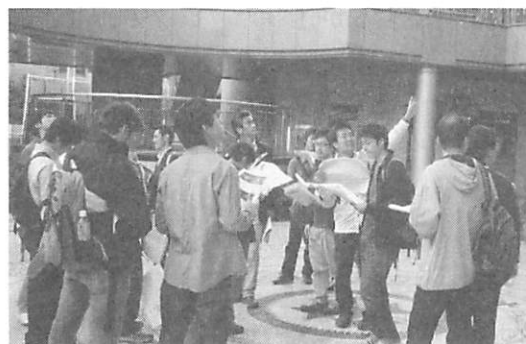
伝統産業を積極的に支える工場の一つ、藤井刃物製作所で、刃物製作現場を見せていただいた。ここで製造された製品は大量生産された製品と比べ、温かみを感じられた。

堺市の中心部では市街地活性化や再開発が行われている

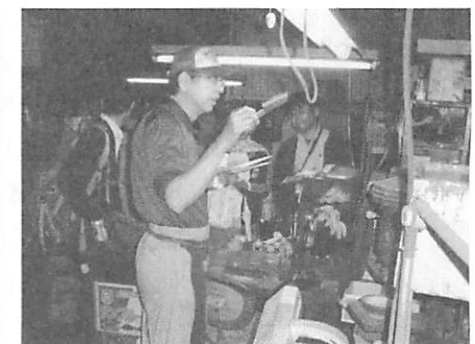
が、実際の利用者は少なく、その効果はまだあらわれておらず、LRT(超低床電車による次世代路面電車)計画も現状では実用性が乏しいといった印象を受けた。

今回の日帰り巡検の歩行距離は短かったが、見所が多く充実していて、全体的に活気があった。今年度で私は修了となるが、今後も巡検には可能な限り参加したいと思う。

(大学院前期課程修了予定)



写真は駅前再開発 (提供: 松原光也)



藤井刃物製作所 (提供: 木庭)

フィールドワークでいろいろな人に会えていろいろな経験が出来、思い出深い4年間を過ごしました☆

佐々木孝恵

終わってみれば短い時間でしたが、たくさんのお話を学ばせて頂きました。ありがとうございました。

澤近光裕

地理での4年間、色々な所へ行った事、先生や友達との出会い、全てにおいてとても充実し、満足出来ました。

曾我 傑

4年間お世話になりました。ここで学んだことや多くの人との出会いは、一生の宝物です。誠にありがとうございました。そして、大学院でもよろしくお願ひ致します。

谷真理子

地理を学んで本当に良かったと思える4年間でした。大学院でも2年間、そう思えるように精進します。

原 章子

地理を専攻したからこそできた経験がたくさんありました。地理を通して出会えた人や体験してきたことから教えられたことも多かったです。あつと言うまででしたが地理学教室で過ごしてきた時間は自分にとって無くてはならないものだったと思います。

卒業生だより

中学1年生の地理的感覚 ～“ふるさと”再発見～ 岡久 友香

関大を卒業して早2年。私は、現在、三田市の中学校で臨時講師として勤務している。去年は、歴史担当（第2学年）で歯がゆい思いをしたが、今年は、念願の地理担当（第1学年）として充実した日々を送っている。

授業をしていると、彼らの発言に驚かされることがある。例えば、「(兵庫県の地図を見ながら)三田ってどこにあるん?」と聞く。彼らは、自分の住んでいる市がどこにあるかわかっていないのだ。彼らの多くは、ニュータウン育ちのため、地元に対する愛着などもわからないだろう。

昨年12月、そんな彼らを丸1日、総合学習の一環として、三田市内で放し飼ひ(一般にいうフィールドワーク)した。目的は、自分の故郷がどんなところか知るためだ。「公共交通機関を2回以上使う」「ニュータウン以外のあるところに行く」という2つのルールを決めて、事前に班ごとに計画を立てた。当日、三田の街を散策していると、牧場に行ってきた生徒たちが駆け寄ってきた。「さっき見てきた三田牛が、どうやって売られているか見たい」という。し

かし、商店への出入りは禁止されている。その時、地理学実習を思いだし、「自分の目で見て、人に聞いて、初めて見えることもあるな」と、生徒たちを連れて「肉屋めぐり」をした。生徒たちは、老舗のグラム何千円もするステーキ用の肉を見て「高い!」と驚き、路地裏のホルモン屋で「うわっ・・・こんな三田牛もあるんや」と目を点にし、緊張しながら店員に質問していた。その表情は生き生きしていた。

フィールドワークの結果をまとめさせ、1ヵ月後、班ごとにプレゼンテーションをしたのだが、その時の生徒の言葉が印象的だった。「牛は、たくさん人の愛情を注がれ大きくなる。そして、人間の体をつくるために肉になる。それなのに、僕らは見た目が気持ち悪いものなどは口にせず、捨てる。それは、命を犠牲にした牛にも、牛に愛情を注いだ人にも失礼や・・・僕らの“ふるさと”の財産なんやから大切にしなあかん。」この言葉を聞いた瞬間、初めて、大学で地理を学んできたことが活かされたような気がした。

(三田市立富士中学校講師 2004年3月卒)

学窓から

関西大学での地理学との出会い

曾我 傑

2002年4月、私は宮崎からここ関西の土地にやってきた。しかし、時の経たつのは大変早く、あれからもう4年が過ぎ去ろうとしている。様々な出来事が昨日のここのように感じられる。そこで、改めて関西大学で地理学と出会ってからの4年間を振り返ってみることにした。

私は、小学生の頃から社会科は好きな科目で、地理も好きな分野であった。高校生の時は「地理」にするか、「日本史」にするか迷ったが、「日本史」を選択した。大学に入学したら、今度は地理学を学んでみたいという気持ちがあったのだが、地理学を選択して授業についていけるのかという不安もあったし、「歴史」が勉強したいという気持ちもあった。そのため、1回生の必修科目である「史学・地理学研究法」のクラス選択の際は、歴史学のクラスにするか、地理学のクラスにするか随分迷った。

迷った挙句「高校生の時にできなかった地理を勉強してみたい」という気持ちを尊重して、地理学のクラスを選択した。しかし、この頃は「何となく地理を勉強してみたい」という漠然とした気持ちしかなかった。

ところが、地理のクラスを選択して、地理学の面白さに私は気付いた。地図を見ながらその土地のことを想像して読み取っていく面白さ、地図を片手に様々な土地を巡るフィールドワークの面白さ等々、この授業は私が地理にはまるきっかけとなった。

フィールドワークといえば、地理学では授業や教室行事で様々な場所を訪れた。その中でも私は、地理学実習で沖縄に行ったことが思い出深い。10月上旬の沖縄は思っていたより暑く、那覇の新都心を1日中歩いて調査することは大変であった。また、アンケート調査も行ったが、実際に歩いている町の人に声を掛けてア

アンケートを取ることは難しく、私はなかなか声を掛けることができずにいた。しかし、友人の声の掛け方を見て、私もそのやり方を真似て、何とかアンケートを集めることができた。難しかったが、大変いい経験になった。そして、帰ってきてから実習報告書をまとめるという作業も大変ではあったが、完成した時は非常に嬉しく、何か一つの物事をやり遂げたという充実感も相まって、皆で喜んだ。

そして、4回生になり卒業論文を執筆する時期となった。私は「宮崎県の公共交通」というテーマで執筆したいと考えていた。しかし、執筆するまでには、どのようなことを議論し、どのような構成にしていけるか、などといった様々な越えるべき課題があり、自分の中で試行錯誤していた。その時、私は地理学で学んだ「フィールドに出かけることと、その大切さ」を思い出した。そこで、宮崎県のバス事業者を訪問するだけでなく、実際にバスに乗車しながら運転手と利用者の様々な声を聞き取るということを行った。残念ながら宮崎県の全市町村を巡ることはできなかったが、ほとんどの市町村を訪れて、多様な声を集めることができた。このフィールドワークを行った結果、少しずつではあるが自分の中で論点がまとまり始めた。

フィールドワークというのは大変面白い。先程も述べたように、地理学では授業や教室行事で様々な場所を訪れる機会があったので、自分が全く行ったことのない地域に出掛けることができた。住民のすすめでその地域の有名スポットに急遽出掛けてみたり、卒業論文の調査時に

は、運転手や利用者から人生論を諭されたり、全く研究テーマとは関係のないことを色々お話したこともあった。しかし、そのことは人生勉強にもなった。

フィールドワークを通して、私は出会った人々から多くの物事を吸収したのであるが、地理学教室で過ごした4年間もそうであったのではないかと思う。多くの友人達をはじめ、先生方、大学院の先輩方との出会いは、自分にとっていい刺激となったし、自分の視野を広げるきっかけにもなった。また、4月に行われる地理学教室のコンパでは、友人だけでなく違う学年の人たちや先生方と話をすることができて楽しかったし、新たな物事を学ぶこともできた。

しかし、部活動を続けながら勉強を進めることは大変であった。特に3回生の時は幹部となったのでより大変に感じていたが、多くの人々のおかげで4回生まで地理学で勉強することができた。ここに感謝の意を示したい。

私は関西大学の地理学教室で多くの人々に出会えて、また様々なことが経験できて本当に良かったと感じている。ここには書き尽くせないくらい他にも様々な思い出がある。改めて振り返ってみたが、地理学で学んだ4年間は充実しており、ここを卒業できることを私は誇りに思う。

今年4月からは大学院に進学し、再びこの地理学教室でお世話になる。この4年間で学んだことをばねにして、また多くの人と出会い、様々な経験を積み重ねて悔いのない2年間を過ごしていきたい。(本学4回生)

舟越寿尚

2年間という短い期間でしたが、とても内容は濃いものでした。先生方、4回生のみなさんありがとうございました。

堀阪純代

ゼミ担当の高橋先生をはじめ、他の先生方には本当にお世話になりました。地理でよかったと心から思っています。

森井英登

4年間学んだことをどうにか仕事に活かしたいと思っています。ありがとうございます。

森岡将紀

実習調査で沖縄に行った事がとてもいい思い出になりました。地理を通して関わった方々に感謝しています。

和田智奈美

卒業論文を通して地元橋本市と向き合えたことは私にとってとても貴重な経験でした。ありがとうございます。

岡田良平

一年の四分の一以上をタイの農村で生活しました。様々な経験をするのが一番勉強になることだと実感しました。ありがとうございます。

尾崎美佳

地理の方々だけではなく、他の研究者の方々とも交流を沢山持つことができ良かった。ありがとうございました。

原稿募集

以下の原稿を募集しております。

1. 【卒業生だより】

卒業生の方からの近況報告等を募集しております。内容は問いません。(字数 800 字前後、図・表・写真可)

2. 【学窓から】

現役の学部生・院生の方から募集しております。日頃の学習・研究活動の様子をご報告下さい。(字数 800 字前後、図・表・写真可)

3. 【研究ノート】

日頃の研究の成果を発表してみませんか。(字数 1,500 字以内、図・表・写真可)

はじめに

1980年代初頭、リサイクル、自然保護運動、地球環境や生態系の保全といった環境を重視する気運の高まりのなかで、観光形態が多様化し、新たな観光旅行の形がうまれた。なかでも一部のツーリストは俗に言う「秘境」へ足を踏み入れた。その目的も、通常行けない所を訪ねたいという素朴なものから、動植物の観察などを主とするスタディツアーやネイチャーツアー、植林や井戸掘削などのボランティアツアーなどに及ぶ。新しい観光形態を創出すべく多様なツアーが様々な業界・団体等によって企画されるようになった。場合によっては、マスツーリズムのサブシステムと考えられるものもあり、これらの総称としてエコツーリズムとする気配がある。本稿の目的は、現状のエコツーリズム概念を整理することにある。

マスツーリズムからの移行

今日の自然環境や野生生物の保護の動きは、1972年の国連人間環境会議（通称「ストックホルム会議」）が出発点といえる。その後、1980年に国際自然保護連合（IUCN）¹⁾、国連環境計画（UNEP）²⁾、世界自然保護基金（WWF）³⁾の3機関が共同で「世界環境保全戦略」を発表した。副題は「持続可能な開発のための生物資源の保全」となっており、これは人類生存のための自然資源の保全の概念を前面に出したものである。これがエコツーリズムの世界的展開のきっかけとされる。

日本では環境庁⁴⁾が1990年に「熱帯地域生態系保全に関する取り組み」の中でエコツーリズムを提唱したのが最初であり、これ以降、様々な機関、団体によってエコツーリズムの概念は変容を遂げてきた。社団法人日本旅行業協会（JATA）⁵⁾は1993年に「地球にやさしい旅人宣言」を発表し、自然観察主体のエコツアーを企画し始めた。1998年には全国組織のエコツーリズム推進協議会（以下JES）⁶⁾が設立された。JESはエコツーリズムを「地域の自然や文化への理解を深め、そのよりよい保全とゆとりある活用により、みずみずしい観光と産業を持続的に発展させる運動」（季刊ECOツーリズムの裏表紙から）と捉え、後述する定義を提唱した。このように1990年代後半の日本では明確な定義のないまま、エコツーリズムが提唱され、認知されてきた。

朝日新聞は2003年10月2日から2004年10月14日まで、木曜夕刊に全49回から構成される連載記事「エコツーリズムのススメ」を特集した。その記事の内容に

表1 朝日新聞「エコツーリズムのススメ」で扱われた記事の分類

記事の対象地域・国	A	B	C	D	E
天売島・磐梯山・白神山地・和賀山塊・岩手県二戸市・軽井沢・小笠原諸島・御蔵島・奥多摩・東京都 松原村・京都府美山町・徳島県美郷村・徳島県上勝町・高知県大方町・阿蘇カルデラ・西表島・南大東島	○	○	○	○	○
白華村・雲南省麗江（中国）					○
ボルネオ島（マレーシア）					○
コスタリカ	○			○	
ガラパゴス諸島（エクアドル）	○			○	
アマゾン川流域・パンタナル湿原（ブラジル）	○				○
アンバザ村（フィジー）					○
ナウル共和国					○
カカドゥ・プレーザー島・モンレポスピーチ（オーストラリア）				○	○
オタゴ半島・クライストチャーチ（ニュージーランド）	○				○
フルミ・トレロン（フランス）					○
サラエボ・プリヴァ川（ボスニア・ヘルツェゴビナ）	○	○			

- A：動植物（具体的な動植物の名称が明記され、その生態観察・見学等を中心としたもの）
- B：自然景観（湿原、砂浜、鍾乳洞など自然景観の学習・見学を中心としたもの）
- C：建築物（民家など人工物あるいは人工的に手が加えられた構造物への見学を中心としたもの）
- D：保全（自然保護・保全などの政策的な内容を中心としたもの）
- E：生活（宿泊体験から地域の生活を理解するもの）

ついて、対象国、対象地域、テーマ等について分類をおこなった。表1では、記事を対象国別、動植物、自然景観、建築物、保全、生活の5テーマに分類した。詳細は別稿に譲るが、エコツアー体験談が49回の内26回（日本に限っては21回中、12回）、生物系を扱っているものは49回中26回を占める。一般にエコツーリズムが環境と深く関わることは明白ではあるが、ここでの環境は自然景観ではなく、生物資源との関わりが強い。

エコツーリズムの概念

エコツーリズムの概念規定には、様々な立場、機関、団体からの切り口がある。小林（2002）は、科学的環境保護分野の団体、国際援助機関、開発途上国、旅行業界の四種の団体・機関の立場の違いが概念を多様にしたとする。観光学や環境論の学識経験者・研究者の定義を加えると、より複雑な様相を呈する。

エコツーリズムという語は1983年にメキシコの建築家ヘクター・セバロス・ラスクラインが初めて使ったとされるが、当初は冒険旅行的な範疇であった。現在、最も標準的なものは、エリザベス・ブー（Boo 1991）が提唱した「保護地域のための資金を生みだし、地域社会の雇用機会を創造し、環境教育を提供することによって、自然保護に貢献するような自然志向型の観光」とされ

る。

自然保護関連では、1992年、ラスクラインによる国際自然保護連合の定義が代表的で「エコツーリズムは、比較的乱されていない自然地域の中で、景観や野生の動植物を観察し、研究し、楽しんだり、また、その地域に存在する過去と現在の文化的特色を対象とする特別の目的をもった旅を含む観光」（流布する翻訳のまま）としている。国際エコツーリズム協会（TIES）⁷⁾は、より明確かつ単純に「環境の保全がなされ、地域住民の福利に貢献している自然の地域へ、責任をもって旅すること」とし、オーストラリアエコツーリズム協会（EAA）⁸⁾も「環境と文化を理解し、感謝したり地域を保全する気持ちを育み、自然地域での体験を主目的とする生態系に配慮した旅」（流布する翻訳のまま）と同様の定義をしている。

一方、1996年に日本自然保護協会（NACS-J）⁹⁾は「旅行者が、生態系や地域文化に悪影響を及ぼすことなく、自然地域を理解し、鑑賞し、楽しむことができるよう、環境に配慮した施設および環境教育が提供され、地域の自然と文化の保護・地域経済に貢献することを目的とした旅行形態」としている。日本エコツーリズム協会も同様「①自然・歴史・文化など地域固有の資源を生かした観光の成立、②地域固有資源の保護・保全、③地域経済への波及効果の実現」を挙げる。

旅行業界でも多くの機関が定義を示している。米国旅行業者協会（ASTA）¹⁰⁾は、「エコツーリズムは、環境との調和を重視した旅行、すなわち野生の自然そのものや環境を破壊せずに自然や文化を楽しむことを目的とする」としているが、日本では、より商業的な定義がみえる。社団法人日本旅行業協会は、①旅行者の教育、②絶滅に瀕した動植物の保護、③文化・歴史的環境保全への貢献、④専門ガイドの利用、⑤地元社会の利益、⑥ゴミの削減と最小限のインパクトの6つの要素のうち、一つ

表2 学識経験者・団体・業界のエコツーリズム概念の分類

	自然環境 の保全	地域への 利益還元	責任ある 旅
学識経験者・研究者			
H. C. Lascurain	○		
E. Boo	○	○	
自然保護関連			
国際自然保護連合（IUCN）	○		
国際エコツーリズム協会（TIES）	○	○	○
オーストラリアエコツーリズム協会（EAA）	○		○
日本自然保護協会（NACS-J）	○	○	○
日本エコツーリズム協会（JES）	○	○	○
旅行業界			
米国旅行業者協会（ASTA）			○
日本旅行業協会（JATA）	△	△	△

△ 1点でも適用されておればよい。

でも入っておればエコツーリズムと認識して良いとする。

以上の定義群から、自然環境の保全、地域社会への利益還元、責任ある旅のキーワードを使って分類を試みた（表2）。概念は時代の風潮や地域観に応じて変容してきたが、いわゆる自然保護団体は受容者側と参加者側の双方に、旅行業界などは参加者側に重きを置いていると考えられる。

おわりに

エコツーリズムのブームとともに「持続可能な観光」が模索されている。利害の関係上、エコツーリズムすべてが、持続可能な観光に結びついていないとは言えない。また短期間しか滞在しえない旅行者には見えない現地での様々な矛盾が報告されている（山下2002など）。筆者も1992年と1998年のインドネシア・バリ島海岸の調査時に、整備された美しい水田の破壊を目撃した。これは、「二酸化炭素削減のためのマングローブ植林」という大儀名分で訪れるボランティア学生のための植林場を事前に設けるというものであった。

エコツーリズムの概念は、営利・非営利にかかわらずツアーを企画する団体だけのものではなく、保護・保全地域の受容側では住民はもとより、その地域を有する国民すべてが共有すべきものであろう。

追記

本稿は磯鴫喜規氏（株式会社ユーストア）が大手前大学人文科学部史学科に提出した2004年度卒業論文の作成時に収集した参考資料を基に主に貝柄が作成した。

[参考ウェブサイト]

- 1) <http://www.iucn.jp> (1948年に設立された世界最大の自然保護機関)
- 2) <http://www.unep.org>
- 3) <http://www.wwf.org> (世界最大の自然保護の民間団体)
- 4) <http://www.env.go.jp>
- 5) <http://www.jata-net.or.jp>
- 6) <http://www.ecotourism.gr.jp>
- 7) <http://www.ecotourism.org>
- 8) <http://www.ecotourism.org.au>
- 9) <http://www.nacsj.or.jp>
- 10) <http://www.astanet.com>

[参考文献]

- 小林寛子, 2002. 『エコツーリズムってなに? フレーザー島からはじまった挑戦』. 河出書房新社, 253 p.
- 山下晋司, 2002. エコツーリズムの政治経済学—マレーシア・サバ州のケースから. 科学, Vol. 72, No. 7, pp. 701-705.
- Boo, Elizabeth, 1991. "Planning for Ecotourism". PARKS, 薄木三生仮訳「エコ・ツーリズム計画」. 国立公園, No. 501, pp. 2-7.

(大手前大学人文学部助教授)

院生・学部生の業績 (2005. 1~2005. 12)

- 岡田良平・野間晴雄：「農村社会の変容過程における学校と進学意識の変化—東北タイ・ドンデーン村—」(口頭発表) 2005年度日本地理教育学会第55回大会および総会, 平成17年8月6日~8日, 専修大学神田校舎
- 岡田良平：「地域文化と学校—三つのタイ農村における「進学」の比較社会学—」(書評)(史泉第102号 pp40-pp47 関西大学史学・地理学会 2005)
- 岡本訓明：「近代の天神橋筋六丁目とその周辺」, (関西大学文学部・地理学教室編「大阪・天六界隈地理散歩—天満巡検—」ハンドブッカー), (関西大学文学部・地理学教室有志), 2005, 30~32頁
- 尾崎美佳：「勤請神事からみた村落社会の崩壊—奈良県明日香村稲淵と栢森の比較—」(口頭発表) 2005年人文地理学会大会(九州大学)
- 片岡 健：関西大学地理学教室編「大阪・天六界隈地理散歩—天満巡検ハンドブッカー」[「本願寺の変遷と大阪天満宮」] 5-7頁, 2005年4月。
- 片岡 健：「土佐国高岡郡久礼における天正期の集落形態」, 『千里地理通信』第53号, 4-5頁, 2005年9月。
- 片岡 健：「茨木周辺旧流路図」, 『茨木城シンポジウム』茨木市立生涯学習センター, 43頁, 2005年11月。
- 片岡 健：『大阪の歴史』第67号(史料紹介)「東京大学法学部法制史資料室所蔵「大阪宗旨役所触扣」(上)」, 95-113頁。共著, 2005年12月。
- 片岡 健：茨木城シンポジウム, フォーラム「茨木城と町の実像」(口頭発表) 登壇発表, 2005年11月19日。
- 野間晴雄・岡田良平：「東北タイ・ドンデーン村40年の経験—何が変わり, 何を遺したか—」(口頭発表) 2005年度日本地理教育学会第55回大会および総会, 平成17年8月6日~8日, 専修大学神田校舎
- 堀内千加：「京都市における人口回帰現象」関西大学史学・地理学会2005年度大会(口頭発表)
- 元田茂充：「捕鯨船乗組員の輩出構造—高知県室戸市を例として—」2005年人文地理学会大会(九州大学)
- 山崎 直：「東西文化接触地帯における食の地域差」(ポスター発表) 2005年人文地理学会大会(九州大学)
- 吉兼崇博：「1980年以降の日本における特定重要港湾取扱貨物の背後流動—広島港と博多港を事例として—」関西大学史学・地理学会2005年度大会(口頭発表)

教室だより

受賞

高橋誠一先生が人文地理学会から、「琉球の都市と村落」(関西大学出版部)の業績に関連して、人文地理学会賞を受賞されました。関西大学地理学教室にとっても栄誉なことです。

平成18年3月期博士号取得者

〔課程博士〕2名

95 D 222 吉田 雄介：イランにおける手織物生産の多様な存在様式—ヤズド州メイボド地域のズィールー・白木綿・ペルシア絨毯生産を中心に—

03 D 2702 Tran Anh Tuan：RURAL TRANSFORMATION OF THE RED RIVER DELTA, VIETNAM—A Comparative Study on Two Coastal Communes, Thai Binh Province—(ベトナム紅河デルタ農村変容に関する研究—タイビン省における2つの沿岸行政村の比較—)

チャン・アイン・トゥアン氏はベトナム国家大学ハノイ理学部地理学部の専任講師である。2000年から始まったベトナム政府若手公務員外国研修プログラムの人文地理学最初の派遣対象者である。

博士号取得者

〔論文博士〕2名

伊東 理：先進国における小売商業の地域的展開

—大規模小売商業施設の立地展開と地域政策に着目して—

野間 晴雄：湿潤アジア稲作社会の歴史生態研究

—農業・技術・村・生活の変容をめぐる比較地誌—

後期課程進学の意味と博士号制度の変更

これまでは後期課程3年間で課程博士を得ることを必ずしも良しとする風潮はなかったのであるが、昨年の秋から様子が変わって、取得すべきという形になってきた。この四月から入学または進学する院生は、下記の要領に従って、これを実現しなければならない。下に示す提出基準からみて、次のような流れになる。

少なくとも修士論文は早急にレフェリー制をもつ全国学会誌に投稿しなければならない。その準備を進めながら、修士論文と関連するかしないかは別にして、並行して次の研究テーマに取り組まなければならない。そして博士課程3年目の秋には博士論文を提出という段取りになる。博士論文の中味は、既存の論文を軸にしたものにならざるを得ないだろう。奨学金の返還免除にも影響すること大で死活問題でもある。

論文博士は近いうちに廃止される可能性が高い。種々の業務に携わる資格として、博士号は重要になっている。博士号を得ようとする方々は早急に提出作業を進める必要がある。

地理学専攻課程博士論文の提出基準

自立した研究者の成果として相応しい内容を持ち、学界に貢献しうると認められるもの。ただし、字数に特別な制限を設けない。論文提出時には、全国学会での口頭またはポスター発表を1回以上、学術論文2篇以上を発表済みまたは印刷中(このうち1篇以上は審査のある全国学会誌)であることを原則とする。なお、論文の提出にあたっては指導教員の指導を十分に受けること。

卒業生の動向

奥野一生さん(本学大学院博士課程後期課程修了, 博士

(文学))は、現在、古今書院の雑誌「地理」に2005年6月号から連載中です。「明日の授業で使える!地形図読図」として日本各地を新旧地形図を駆使しての執筆です。関大や江坂周辺については10月号に掲載されました。

海外出張

伊東先生：10月30日～11月8日、イギリス（関西大学経済政治研究所研究費、イギリス都市の活性化に関する調査）。3月6日～22日、イギリス（日本学術振興会科学研究費）。

野間先生：12月4日～7日、タイ（インターディパートメント専修エアスタディコースの学生引率）。1月21日～29日、フィリピン（日本学術振興会科学研究費、フィリピン人文地理学の動向調査）。2月23日～3月1日、タイ（私費、ドンドン村補足調査）。

橋本先生などの出張については次号回し。

春のバス巡検で会いましょう

日 時：平成18年5月27日（土）

～5月28日（日）日帰りまたは1泊2日

テーマ：阪神、播磨間の沿岸地域の変貌と奄美・沖縄との関わり

集 合：日本交通 弁天営業所前 JR 弁天町駅下車 8時45分集合（厳守）雨天決行（JR 大阪環状線弁天町駅西口か中央大通りを海側へ徒歩3分、大阪市港区磯路2-23-27、電話06-6576-1121）午前9時には出発します。1日目昼食は弁当を用意します。

コース：5月27日（土） *は下車説明地点
弁天町営業所→大阪港*→大正区の沖縄出身者集住地区*→川口（旧居留地、旧大阪港）*→国道2号線→尼ヶ崎大物公園*→尼崎城下町*→奄美・鹿児島出身者集住地区*→尼崎臨海工業地帯→阪神高速湾岸線→東部新都心 HAT KOBE（防災とまちづくり）、昼食*→湊川旧河道跡*→和田岬*→長田区震災復興地*→舞子景勝地と外国人住宅*→明石原人出土地・段丘地形*→高砂臨海工業地→大塩塩田跡*→姫路（到着は18時頃、宿泊・コンパ）

5月28日（日） 徒歩見学

姫路9:00→姫路城→姫路城下町→地場産業（皮革・マッパ）→JR 姫路駅（12時頃解散）

JR 新快速で大阪まで約50分、山陽電鉄・阪神電車で約90分

宿泊先：ほていや旅館（姫路市内）

〒670-0924 姫路市紺屋町 84

電話 0792-22-1210 FAX 0792-82-1210

費用：2000円（バス・高速通行料、1日目の昼食）、1泊2日の人は1.2万円、朝食・夕食、コンパ、姫路城入場料等を含む 当日徴収）

★帰りの姫路からの交通費と2日目昼食代は自己負担

解 散：5月28日（日）

12時ごろに姫路市内で現地解散

関西大学地理学教室ウェブサイトの開設

2006年の1月、関西大学地理学教室ウェブサイトを開設しました。私が2004年の4月に博士課程後期課程に入学したときに、先生がたより新たに作ってほしいという要望を受け、博士課程前期課程の山崎、尾崎両名とともに作成にあたりました。他大学から入って不慣れだったことや、先生がたとの調整に時間がかかり、とうとう1年半が経過してしまいました。

内容は主に受験生が、関西大学で地理学を学ぶための参考にしてもらうということで構成してあります。講義の構成や先生がたの紹介、院生室の紹介が掲載されています。また、どこかなクイズや千里地理占いなどの地理に親しめるページも用意しました。

今後は、授業や巡検のようすなども加えていく予定ですが、掲載されたい情報等がありましたら、moto@ipcku.kansai-u.ac.jp まで連絡をお願いします。時間や人手の制約もあり、すぐに掲載できないこともあるかと思いますがご了承願います。

（博士課程後期課程 松原光也）

堺市日帰り巡検報告

研究会主催の日帰り巡検は、2005年10月30日（日）、下記のコースで堺市域を回りました。

南海電鉄高野線堺東駅→堺市役所屋上→堺東駅前商店街（堺銀座街・昼食）→土居川公園→堺奉行所跡・糸割符会所跡→山之口筋→大小路→堺駅前再開発→阪堺電鉄（大小路→妙国寺前運賃200円）→刃物伝統産業会館→西本願寺堺別院→藤井刃物製作所（刃物製造見学）→南海本線七道駅（現地解散）

なお現地説明やレジュメの作成は大学院生の岡田良平・生地泰明・松井幸一・森本英揮・吉兼崇博、四回生の川合はるな・河野俊英・曾我傑・舟越寿尚が担当しました。

87回例会（研究例会）報告

昨年12月10日（土）に87回例会が関西大学地理学教室で行われました。発表者は水田憲志（博士課程後期課程）「日本植民地時代台湾における在留日本人の諸相→台北における沖縄出身「女中」の経験」、上村要司（(株)日本能率協会総合研究所）「シンクタンク・コンサルタント業界に身をおいて」、木庭元晴（関西大学）「いま、研究していること」でした。また、研究会終了後、同所で恒例の忘年会が行われました。

読者の皆様への御願い

今号の千里地理通信とあわせて「郵便振替振込書」を同封いたしております。本通信の内容の充実と関西大学地理学教室の運営のためにもお手数ですが、1年分の会費1,000円をお近くの郵便局から為替でお振込み下さい。複数年まとめてお支払いいただくと助かります。

生地泰明

フィールドで思いもよらぬ経験をしました。おそろく死ぬまで忘れたいでしょう。そういう経験をできただけでも価値ある2年間だったと思います。

堀内千加

たくさんの方に支えられて充実した2年間を送る事ができました。先生方や地理学教室の皆さんに感謝致します。

松井幸一

2年という期間は学部在籍時に比べれば短かったです。より充実した時間を過ごせたと思います。ありがとうございます。

森本英揮

地理学にどっぷり浸かることができ満足しています。いろいろな方にお世話になり、大変ありがとうございました。

山崎 直

東北・関東・関西と三つの違う文化や言葉に触れることができ、非常に良い経験になりました。また様々な人々や出来事に会えたことは一生の宝になると思います。短い2年間でしたがありがとうございました。

吉兼崇博

この2年間は、決して順風満帆ではなく、大きな挫折も経験しました。そんな時、公私に渡って、皆さんの温かい支えがあり、ここまで来る事ができました。本当にありがとうございます。

戦前の地理は、国策上、重要な科目であった。地図作成、読図、農林水鉱工業の産地や生産量、人口など、国家システムを構築する上で基礎的教科と言えた。地学は日本では欧米に模して戦後に生まれたもので、天文・気象・地質で構成される。京都府の高校に通った私は、地理も地学も1年生の時に必修科目として週に5時間学んだ。いまは、地理と地学は、社会と理科という違いはあるものの、学校教育では類似のきびしい状況にある。日本全体の履修者比率について明確ではないが、地理が2割強程度、地学は1割を切るだろう。

この状況に至った理由は一つではないであろうが、入試との関連が最も理解しやすい。入試の主要科目は、理科では物理と化学、社会科では日本史と世界史である。地学など理系分野を大学で深く学ぶには、より基礎分野である物理と数学が必要である。受験生の負担を大きくせず大学入学後の研究の展開を期待するのであれば地学は省略してもいいとも考え得る。

ところが、地学に対応する論理を地理に当てはめるには無理がある。大学入学後、地理学を深く学ぶのに歴史を前もって学ぶ必要性は低い。文系学部全体を通じて、前もって歴史学を学ぶ必要性はないだろう。文系の学問を深める前提となる素養としてどういう科目を設定すればいいのか。歴史に重きをおかず、過去の文化や思想の中味を学び、論理的展開力を高める科目がおそらく文系の基礎科目として適当であろう。この意味では歴史は入試科目として適当ではない。それにもかかわらず、なにゆえ重視されているのか。これを論じる蘊蓄を私は持たないが、おそらく幕末からの国史の流れと関連があらう。

このように、大学で学習や研究をするための基礎科目という視点では、地学と地理の凋落をまとめて説明することができない。とすると、高校の科目に関連した大学での研究室の力関係に求めうるのか。入試科目の英数国理社にかかわる学部は、文学部と理学部である。実学分野からの積極的科目はこれまで提示されていない。戦後誕生した新制の国立大学は理学部の構成学科について地学科と生物学科の二者択一を文部省に迫られた歴史があり、その意味でも地学科は生物学科とともに理学部では弱い立場にある。地理学教室はご存知のとおり文学部と理学部またはその相当学部にあるが、戦後誕生した新制の国立大学で地理学教室を持つ大学は10校ほどである。このように、この力学が地学と地理の現在の弱い立場を説明していると考えてよいだろう。学校で学ぶ分野はこのように決まってきた。

ひるがえって、地学や地理は、はたして他の教科と比べて学校教育でより必要なものだろうか。社会人の素養または生きてゆくための情報の価値という視点から見て、どうだろうか。日本地誌や世界地誌は、現在提供されているものが最も適切かどうかは別にして、生徒の世界観を築く上でかなり重要な位置を占めるであろう。人類の進化に至る地球観もさることながら、地学で学ぶ災害科学は、個人だけではなく人類の福祉にも貢献するであろう。

小学校の時代から地理や地学の分野に私は興味があった。その私であっても、地理や地学は暗記的科目であると感じてい

た。今の若者の地理や地学の知識が極端に低いことから想像するに、現在の小中学校では私の時代とは違って、暗記することを求めているようである。それゆえ、今の若者が地理を暗記科目と考えているかはわからない。私の時代でもそうであるが、歴史の方が暗記すべきことは多かった。とすると、地理や地学を暗記科目とするのは、情報間の繋がりについて、魅力が低いということかも知れない。

算数・数学や国語を暗記科目とは言わない。しかしながら、算数・数学では九九や多数の公式を覚えなければならないし、国語も多くの漢字や熟語または古語を覚えなければならない。地理や地学よりも覚えることは多い。にもかかわらず何故、暗記科目の印象があるのか。——それは文脈だろうと思う。算数・数学や国語は同様の知識が繰り返される。そのことによって、頭脳に文脈が形成される。科目内容を面白くするための教科書作成の努力は、地理も地学も大変なものである。ところが両科目とも広範囲の知識型であるが故に、型にはまった繰り返しが少ない。多様であるがゆえに、生徒が対応できないのである。そのため、捉えられず放棄される。

ではどうすればいいのか。地理も地学も広汎な知識の海の底に流れるロジックはそれほど多くはない。自然現象であれ、人文現象であれ、時間軸でのプロセスや空間分布の違いにこだわるのが多く、それをただ羅列することで教科書が終わっている。例として砂地形の名称の一つ砂嘴を取り上げよう。教科書には砂嘴の図やその分布上の特徴が示されている。ところがその成因は述べられていない。ど

のように砂嘴が生まれてその地形が現出し続けるのかを問わない。都市であっても地図にその分布が示されるが、砂嘴と同様その成因と存在の理由が示されない。大阪一つをとっても現在では国際経済と連動しており、単に秀吉の城下町、東洋のマンチェスター、というような過去の経緯や淀川の水というような自然環境を示すだけでは説明できない。ではより多様な情報を駆使すればいいのか。——そのいわば反対の方向である。基本的な都市存立の枠組みこそ想定すべきなのであって、そのモデルを示すことがより教育効果が大きいと想像される。

地理も地学もその教育を成功させるためには、知識の羅列から脱却し、有効なモデル群を提示することが重要となると考えるのである。(本学教授)

随想

地(理・学)の再生にむけて

木庭 元晴

千里地理通信 第54号

2006年3月20日 発行

関西大学文学部地理学研究会

〒564-8680 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学文学部地理学教室内

Tel: 06-6368-1121(内線 4890: 大学院生室)

e-mail: moto@ipcku.kansai-u.ac.jp

URL: http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~moto/KU_Geography/index.html

郵便振替: 大阪 00970-4-81149